八代集の「さやかなり」について

――形容動詞と和歌（4）

謝　静

はじめに

形容動詞「さやかなり」は、ひめまつの会編『八代集総索引 和歌自立語篇』（一九八六年、大学堂書店。以下「和歌自立語篇」を省略する）によれば、八代集に十五首の使用例が見出せる。これは、古典和歌に形容動詞の使用例が少ないという全般的傾向の中では、多くはないにしても、一定のまとまった数であると判断される。

『日本国語大辞典 第二版』（以下、「第二版」を省略する）は、この語の意味について、次のように解説している。

さや-か　【明―・清―】〔形動〕（「か」は接尾語）

(1)はっきりとしているさま。明るく清らかであるさま。明白に、よく見えるさま。あきらか。はっきり。明瞭（めいりょう）。まさやか。

(2)音声が高く澄んでいるさま。さえてよく聞こえるさま。

(3)さわやかなさま。爽快であるさま。《季・秋》

この形容動詞には、語基「さや」を共有し、よく似た意味を表す形容詞「さやけし」がある。その『日本国語大辞典』における解説は、次の通りである。

さやけし【明―・清―・爽―】〔形ク〕

(1)けじめがはっきりしている。はっきりしていて明らかである。あざやかである。見た目に分明である。

(2)清らかである。さっぱりしている。気分的にさわやかである。すがすがしい。《季・秋》

(3)音、声などがはっきりとしてさわやかである。快い響きである。耳に快く感じられる。

「さやけし」の八代集における用例は十八首で（『八代集総索引』による。金葉集三奏本を除く）、「さやかなり」とほぼ同じくらいの使用例が見出せる。

本研究では、『万葉集』における用例や「さやけし」との差異に注意しながら、八代集における「さやかなり」の用例を概観することにする。

一

古典索引刊行会編『万葉集索引』（二〇〇三年、塙書房）によると、『万葉集』における「さやかなり」の用例は次の四首である。[1]

・大君の　命恐み　にきびにし　家を置き　こもりくの　泊瀬の川に　船浮けて　我が行く川の　川隈の　八十隈落ちず　万度　かへり見しつつ　玉桙の　道行き暮らし　あをによし　奈良の京の　佐保川に　い行き至りて　我が寝たる　衣の上ゆ　朝月夜　さやかに見れば　たへのほに　夜の霜降り　石床と　川の氷凝り　寒き夜を　息むことなく　通ひつつ　造れる家に　千代までに　いませ大君よ　我も通はむ

（巻第一・七九）

・我が背子が　かざしの萩に　置く露を　さやかに見よと　月は照るらし

（巻第十・二二二五）

・新墾の　今作る道　さやかにも　聞きてけるかも　妹が上のことを

（巻第十二・二八五五）

・群鳥の　朝立ち去にし　君が上は　さやかに聞きつ　思ひしごとく

（巻第二十・四四七四）

『万葉集』で用いられた「さやかなり」は、連用形「さやかに」だけが用いられていて、連用修飾語として動詞「見る」「聞く」にかかっていることがわかる。

七九番歌で「さやかなり」は、大君の命によって出向いた奈良の新都の佐保川の情景を描いた中に用いられていて、「朝月の光ではっきり見ると、真っ白に夜の霜は降り、岩床のように厚く川の氷は張り詰め」（新編全集）というように、月の光によって物をはっきり見るという文脈で用いられている。

二二二五番歌では、月が明るく照っていることについて、「あなたが髪に挿している萩に置く露をはっきり見よ」（新編全集）と言っているのだろうと推測している。

二八五五番歌は、道に寄せる恋の歌である。初二句は「さやかに」を引き出す序詞となっていて、「新墾の今作る道さやかにも」というつながりで、「今作ったばかりの道はすがすがしい」という意味を表し、「さやかにも聞きてけるかも」で「（娘のことを）はっきり聞いたことだなあ」の意味を表している。

四四七四番歌では、「あなたの噂ははっきり聞きました」という意味を表している。

以上のように、『万葉集』における「さやかなり」は、「見る」にかかる用法（二例）と、「聞く」にかかる用法（二例）とに大別される。「見る」にかかる場合は、月の光によって何かを「はっきりと」見るという意味を表す。「聞く」にかかる場合は、物音ではなく人の消息や噂を「はっきり」聞くという意味で用いられている。また、序詞のレトリックの中ではあるが、「新墾の今作る道」を受ける述語として、「（新しい道は）すがすがしい」の意

を表す用法も見られる。

次に比較対象として、『万葉集』における「さやけし」の用例を概観しておく。

『万葉集索引』によると、『万葉集』における「さやけし」の用例は一六首であり、「さやかなり」よりもかなり多く用いられている。そのうち、「川」について用いられた例が最も多くて十首。ついで「月」について用いられたのが三首。残るは、太刀、浜、湖の景観について各一首となっている。今、川と月の用例を取り上げてみる。

川について「さやけし」と表現している例は、視覚的にとらえたものと、聴覚的にとらえたものとに大別される。

・……神風の　伊勢の国は　国見ればしも　山見れば　高く貴し　川見れば　さやけく清し……

（巻第十三・三二三四）

・……うちなびく　春の初めは　八千種に　花咲きにほひ　山見れば　見のともしく　川見れば　見のさやけく……

（巻第二十・四三六〇）

は、川の美しさ、すがすがしさを、視覚的に「さやけし」と表現したものだ。

・……春の日は　山し見が欲し　秋の夜は　川しさやけし……

（巻第三・三二四）

・……雲居なす　心もしのに　立つ霧の　思ひ過ぐさず　行く水の　音もさやけく……

（巻第十七・四〇〇三）

は、川の流れる水の音のすがすがしいさまを、聴覚的に「さやけし」と表現した例である。ほかに、山と組み合わせて、

・今造る　久邇の都は　山川の　さやけき見れば　うべ知らすらし

（巻六・一〇三七）

・うつせみは　数なき身なり　山川の　さやけき見つつ　道を尋ねな

（巻二十・四四六八）

というように、情景を広く「山川」ととらえて、その清らかさ、すがすがしさを、「さやけし」と表現した例もある。

月についての用例は、次の三首である。

・春日山　おして照らせる　この月は　妹が庭にも　さやけかりけり

（巻第七・一〇七四）

・思はぬに　しぐれの雨は　降りたれど　天雲はれて　月夜さやけし

（巻第十・二二二七）

・ぬばたまの　夜渡る月の　さやけくは　よく見てましを　君が姿を

（巻第十二・三〇〇七）

一〇七四番歌は、空高く照らす月が「妹が庭」も明るく照らしていることを表現している。二二二七番歌では、雲が晴れて空の月が澄んでいる様子を「さやけし」で表している。三〇〇七番歌は、逢瀬の夜に「月がおぼろであったため、相手の顔がよく見え

なかったことを残念に思」う気持ちを詠んだ歌（新編全集）である。空の月が明るければ、ということを「さやけし」を用いて表現している。

以上のように、『万葉集』の「さやけし」は、川、山が感じさせる、清らかですがすがしいさまや、月が澄んで明るいさまというように、景物がどのような状態であるのかを示すのが主な用法であると考えられる。

これに対して、「さやかなり」は、対象のありようを示すのではなくて、人の「見る」「聞く」という行為について、連用形「さやかなり」の形で「はっきりと（見る・聞く）」と形容するために、主として用いられている。

・我が背子が　かざしの萩に　置く露を　さやかに見よと　月は照るらし　（巻第十・二二二五）
・ぬばたまの　夜渡る月の　さやけくは　よく見てましを　君が姿を　（巻第十二・三〇〇七）

右の二首はどちらも月の明るさを話題にしているが、「さやかなり」と「さやけし」の用いられ方は大きく異なっている。「さやけく」は、月を受けての述語として用いられ、月そのものの清らかに澄んださまを叙述しているのに対し、「さやかに」は「見る」の連用修飾語として、月の光によって露をはっきり見る意を表しているのである。

『万葉集神事語辞典』（國學院大學デジタル・ミュージアム）は、「さやけし」について、その語義を、「①はっきりしていて明らかである。あざやかである。②明るく清らかである。気分的にさわやかである。すがすがしい。」と記した後に、

月明かりや景色を視覚的に捉えた用例と川や波の音、鹿の鳴き声などを聴覚的に捉えた用例に大きく二分できる。万葉集での表記の多くは「清」であるが、これは「きよし」とも「さやけし」とも訓まれている。「川見れば　さやけく清し」（13-3234）や「山川を　清みさやけみ」（6-907）という用例があるように、「さやけし」と「きよし」は根本的に同対象の描写に用いられることもあり、その違いをはっきり説明するのは困難である。しかし、「清き川瀬を　見るがさやけさ」（9-1737）という用例から考えると、「きよし」が対象の汚れなきさまをあらわすことが多いのに対して、「さやけし」はその対象から受けた主体の感覚・心情について言う場合が多いようである。……「さやけし」という語は、古代の人々の独特な美意識を反映した語だと言えよう。（新谷秀夫氏執筆）

と解説している。ここで「さやけし」について以上のように示された「対象から受けた主体の感覚・心情」「独特な美意識」は、『万葉集』に用いられた「さやかなり」からは、ほとんど看取されないものと言ってよいだろう。

このように、『万葉集』における「さやかなり」と「さやけし」の用法は大きく異なっていて、前者が「さやかに」という形で専ら副詞的に用いられている。その中で、序詞のレトリックの中ではあるが、新しい道から受ける印象を、「さやかに」（すがすがし

く）と表現した例が一例見られたことは、「さやかなり」の陳述性、叙述性を示すものとして注意すべきであろう。

二

八代集においては、「さやかなり」は、前述のように十五首にその用例が見られる。その歌集ごとの分布は、左記の通りである。

古今集…3首　後撰集　…1首
拾遺集…3首　後拾遺集…なし
金葉集…なし　詞花集　…なし
千載集…2首　新古今集…6首

総数が少ないので統計的には何とも言えないが、後拾遺集・金葉集・詞花集で一首も用例が見えないのに、その後復活して新古今集に用例が多いことは注目される。

次に部立ごとに整理すると、次のようになっている。

四季の歌…8首（春0　夏2　秋5　冬1）
恋の歌　…3首
その他　…4首（哀傷1　羇旅1　神祇2）

このように「さやかなり」は、他の部立より四季の歌に多く用いられており、中でも秋の歌の用例が五首あることが目立っている。

以下、四季の歌、恋の歌、その他の歌、という順に、「さやかなり」[2]がどのように用いられているのかについて、確認することとする。

三

○四季の歌

四季の歌に用いられた「さやかなり」八例のうち、七例は連用形「さやかに」であり、残る一例は未然形「さやかなら」である。そこで、まず「さやかに」の用例について概観したい。

・秋きぬと目にはさやかに見えねども風のをとにぞおどろかれぬる
（古今集・秋上・一六九・藤原敏行朝臣・「秋立日、よめる」）

・浅茅生の露けくもあるか秋来ぬと目にはさやかに見えけるものを
（千載集・秋上・二二七・仁和寺法親王守覚・「（秋立日よみ侍ける）」）

・をとは山さやかに見ゆる白雪をあけぬとつぐる鳥の声かな
（新古今集・冬・六六八・高倉院御歌・「上のをのこども、暁望山雪といへる心をつかうまつりけるに」）

右の三首では、「さやかに」は動詞「見ゆ」の連用修飾語として用いられている。

「秋きぬ…」の歌は、立秋を主題とする歌である。秋が来ても、木の葉が急に紅葉するわけではなく、秋の草花が咲き始めるわけでもない。そのように、秋が来たと目には「さやかに」（はっきり）見えないけれども、風の音を通して秋が来たことを判断したことを詠んだ歌である。上の句の「目にはさやかに見えね…」は視覚的な用法であり、下の句の「風のをとにぞ…」が聴覚的なものであるのと対照になっている。

「浅茅生の…」の歌は、「秋来ぬと…」詠を本歌として踏まえ、本歌の「さやかに見えねども」を「さやかに見えけるものを」と反転させている。この歌については、次のように解釈が分かれている。

・浅茅原は一面の露。涙もよおして霞みがちになることだ。折角秋が来たと世界がはっきり見えていたことなのに。
（新大系）

・浅茅生が露っぽくなっていることだよ。秋がやって来たとこのようにはっきり見えるのにねえ。
（和泉古典叢書[3]）

この浅茅生は立秋の日の目に見える景色そのものと考えればよく、そこから詠者の涙を連想する必要はないと思われるので、和泉古典叢書の解釈に従うべきであろう。「秋来ぬと…」詠では、秋が来たと目にははっきり見えないと詠まれていたのに対し、この歌では、庭の浅茅生に露が置く景色を見て、秋が来たとはっきり見えるのに、と古今集歌に異を唱えている。

「をとは山…」の歌は、音羽山に積もった白雪の明るさを日の光と錯覚して、鳥が夜明けを告げるさまを詠んでいる。

この歌の上の句は、「音羽山がそのためにくっきりと見える明け方の白雪であるのに」と解釈されている。ここでは、「さやかに」は「くっきりと・はっきりと」の意に解されているが、鳥が雪を夜明けの光と勘違いしているところから見て、「音羽山の明るく見える雪を」というように素朴に解釈するほうがよいであろう。

以上の三首に見える、「さやかに」「見ゆ」の意味は、「秋来ぬと…」詠、「浅茅生の…」詠では、「はっきりと見える」意で、「さやかに」は副詞的に用いられている。これに対し、「をとは山…」詠では、山に降り積もった雪の白さを「明るく見える」と表現していて、『万葉集』の用例には見られなかった視覚的イメージを伴う用法が見られることに注意される。

秋の夜の月に重なる雲晴れて光さやかに見るよしも哉
（後撰集・秋中・三二〇・読人しらず・「（秋歌とてよめる）」）

これは、秋の月に雲がかかっているのを残念に思って、雲が晴れてくれればよいのにと願った歌である。下の句の「さやかに」については、「さわやかに月の光を見たいものであるよ」（新大系）、「月の光をくっきりと見るてだてが有ったらよいのになあ」（和泉古典叢書）というように、微妙に解釈が分かれている。

・秋の月光さやかに紅葉ばのおつる影さへ見えわたるかな
（古今六帖・第一・二九六・「秋の月」）

・やはらぐる光さやかにてらしみよたのむ日吉のななのみやしろ
（拾遺愚草・七九〇・「神祇」）
・あまくだる神ぢの山の木間よりひかりさやかに出づる月かげ
（宝治百首・一五六七・為家・「山月」）

右の用例から見て、「光さやかに」という表現は、「光をさやかに」の意を表すのではなく、「光がさやかな状態で」の意を表すものと判断される。当該歌「秋の夜の…」の「さやかに」は、「秋の月…」詠のそれと同様、秋の月の光の、「明るく清らかであるさま」（『日本国語大辞典』(1)）を表現しているものと判断される。

・秋の月山辺さやかに照らせるは落つるもみぢの数を見よとか
（古今集・秋下・二八九・読人しらず・「（題しらず）」）
・底清み流るる河のさやかにもはらふることを神は聞か南
（拾遺集・夏・一三三・よみ人知らず・「題知らず」）
・一声はさやかになきてほととぎす雲路はるかにとをざかるなり
（千載集・夏・一五九・前右京権大夫頼政・「（時鳥の歌とてよめる）」）

右の三首で「さやかに」は、それぞれ「照らす」「はらふ（祓ふ）」「なく（鳴く）」を連用修飾している。

「秋の月…」詠では、月が山辺を「さやかに」照らすさまを見て、「散り落ちるもみじ葉の数を見なさいというのか」と推測している。この「さやかに」は、散る紅葉の葉の数が数えられるほど、月の光が「明るく清らかである」（『日本国語大辞典』(1)）ということを表現している。

「底清み」詠では、「底清み流るる河の」が、序詞として「さやか」を導いている。この序詞からのつながりにおいて、「さやかに」は、川が澄み切っている様子を表す。その一方、「はらふる」へのつながりでは、「清浄な心で祓をして祈願した」（新大系）の意も表している。「さやかに」が示しているこの二つの意味は、ともに『日本国語大辞典』が示す「清らかである」という語義(1)に当てはまる。

「一声は…」詠は、郭公が一声「さやかに」鳴いて、遠くに飛び去って行ってしまったことへの感慨を詠む。「さやかに」は、ほととぎすの声が「高く澄んでいるさま」「さえてよく聞こえるさま」（日本国語大辞典(2)）を表している。

・薄霧のたちまふ山のもみぢ葉はさやかならねどそれと見えけり
（新古今集・秋・五二四・高倉院御歌・「紅葉透霧といふことを」）

「薄霧の…」詠は、薄霧が立ち舞うため、山の紅葉がはっきり見えないことを「さやかなら」（ぬ）と表現している。これは、『日本国語大辞典』の示す「見た目に分明である」の意(1)に当てはまる。

以上のように、四季の歌に用いられた「さやかなり」は、『万葉集』の用例と同様に、「はっきりと」（見える）という副詞的用法が二首見られる（古今集一六九番歌、千載集二二七番歌）一方、

他の六首では、白雪、秋の月の光、河の流れ、禊をする人の心、郭公の声、紅葉について、『日本国語大辞典』が示す、視覚的、聴覚的語義を、多様に表していることがわかる。

四

○恋の歌

八代集の恋部において、「さやかなり」を用いる歌は三首で、うち二首は「さやかに」という形で動詞「見る」にかかる用法、一首は、「さやかなりける」という形で名詞「月かげ」にかかる用法である。

・三日月のさやかにも見えず雲隠見まくぞほしきうたてこの頃
（拾遺集・恋三・七八三・人麿・「（題しらず）」）

・さやかにも見るべき月を我はただ涙に雲る折ぞ多かる
（拾遺集・恋三・七八八・中務・「返し」）

・入るかたはさやかなりける月かげを上の空にも待ちしよゐかな
（新古今集・恋四・一二六二・紫式部・「人につかはしける」）

この三首では、「さやかなり」は月とともに詠まれている。「三日月…」詠は、雲に隠れて「さやかに」見えない三日月を、恋人が姿を見せないことの比喩に用いて、逢いたい気持ちを詠んでいる。「さやかにも…」詠は、「恋しさは同じ心にあらずとも今夜の月を君見ざらめや」（拾遺集・恋三・七八七・源信明・「月明かかりける夜、女の許に遣はしける」）への返歌として、「さやかに」見るはずの月を、あなたが恋しくて流れる涙に曇って見えない、と詠んでいる。「入るかたは…」詠は、恋人（男）を恨む歌であり、月を恋人の比喩に用いて、その通って行く相手の女ははっきり分かっていることを、「さやなかり」で表現している。

この三首の用例では、「さやかなり」はどれも、『日本国語大辞典』の示す「はっきりしていて明らかである」の意（1）を表している。

○その他の歌

四季、恋以外の歌に見える「さやか」の用例は、哀傷歌一首、羇旅歌一首、神祇歌二首である。

・水の面にしづく花の色さやかにも君が御かげのおもほゆる哉
（古今集・哀傷・八四五・篁朝臣・「諒闇の年、池のほとりの花を見て、よめる」）

・あづまぢの佐夜の中山さやかにも見えぬ雲居に世をやつくさん
（新古今集・羇旅・九〇七・壬生忠峯・「（題しらず）」）

・神路山月さやかなるちかひありて天の下をばてらすなりけり
（新古今集・神祇・一八七八・西行法師・「（題しらず）」）

・さやかなる鷲の高嶺の雲井よりかげやはらぐる月読のもり
（新古今集・神祇・一八七九・西行法師・「伊勢の月読の社にまゐりて、月を見てよめる」）

「水の面…」詠では、「水の面にしづく花の色」が、序詞として「さやか」を導いている。この序詞からのつながりにおいて、「さやかに」は、「花の影の色が清らかで鮮やかなもの」（新大系）であるさまを示す。その一方、下の句へのつながりでは、「帝の面影がたいへん鮮やかに思い浮かべられる」（新大系）の意も表している。「さやかに」が示しているこの二つの意味は、ともに『日本国語大辞典』が示す「明るく清らかである」という語義(1)に当てはまる。

「あづまぢの…」詠の「さやかに」は、「見えぬ」にかかって、「雲に隔てられて何もはっきりと見えない」（新大系）の意を表している。

「神路山…」詠、「さやかなる…」詠は、ともに西行が詠んだ神祇歌で、「さやかなり」は、月が空に「清らかに輝いている」さま、「清らかにさえて照らす」さま（ともに新大系）をそれぞれ示している。ここでは月は神祇・仏道にかかわる神聖な存在として輝いていて、その光の清らかさ、明るさを「さやかなり」と表現している。

以上のように、哀傷、羇旅、神祇歌における「さやかなり」の用例には、「はっきり」見え（ない）の意の副詞的用法が見られる一方、「花の色」「月」を受けた陳述的な用法、「さやかなる」の形で、「ちかひ」「鷲の高嶺の雲井」を連体修飾する用法など、多様な用いられ方をしていることがわかる。

五

ここで、比較のために、八代集における形容詞「さやけし」の用例を概観しておきたい。

「さやけし」は八代集において十八首に用いられているが、そのうちの大多数を占める十五例が「月」について用いられている。今、その典型的な用例を示してみよう。

・照る月の秋しもことにさやけきは散るもみぢ葉を夜も見よとか
（後撰集・秋下・四二八・よみ人しらず・「題しらず」）

・秋の月光さやけきもみぢ葉の落つる影さへ見えわたる哉
（後撰集・秋下・四三四・よみ人しらず・「題しらず」）

・ここにだに光さやけき秋の月雲の上こそ思ひやらるれ
（拾遺集・秋・一七五・藤原経臣・「延喜御時、八月十五夜蔵人所の男ども月の宴し侍けるに」）

・久方の月をさやけみもみぢ葉の濃さも薄さも分きつべら也
（拾遺集・雑秋・一一二七・よみ人知らず・「題知らず」）

・つねよりもさやけき秋の月を見てあはれこひしき雲の上かな
（後拾遺集・雑一・八五四・源師光・「前蔵人にて侍りける時、対月懐旧といふ心を人々よみ侍りけるに」）

・秋の夜の月のひかりのもる山は木の下かげもさやけかりけり
（詞花集・秋・九九・藤原重基・「関白前太政大臣の家にてよめる」）

これらの歌では、月の明るさをそれぞれ「さやけし」と表現している。その中で、「照る月の…」詠、「秋の月…」詠、「久方の…」詠は、月の明るさを強調するために、「散るもみぢ葉を夜も見よ」「もみぢ葉の落つる影さへ見えわたる」「もみぢ葉の濃さも薄さも分きつべら也」というように、昼だけでなく夜も紅葉が見えるということを引き合いに出している。

これらは、『八代集』の「さやかなり」の用例として、すでに検討を加えた和歌、

秋の月山辺さやかに照らせるは落つるもみぢの数を見よとか
（古今集・秋下・二八九・読人しらず・「（題しらず）」）

とほぼ発想を共有しており、「さやけし」と「さやかなり」の意味・用法が、『万葉集』よりもずっと近いものとなっていることを、端的に示すものと言えるだろう。

・山のはに入りにし夜はの月なれどなごりはまだにさやけかりけり
（後拾遺集・雑六・一一八三・よみ人しらず・「二月十五夜月明く侍けるに、大江佐国が許につかはしける」）

これは、涅槃会が行われる二月十五日に詠まれた歌で、雑六の釈教の歌群に収められている。「山のはに入りにし月」は「涅槃に入った釈尊の比喩」であり、「なごり」は「月の沈んだあとの余光。釈尊の残した教え（遺教、遺法）の比喩」（ともに新大系）である。ここでは「さやけし」は、「遺法が伝わっていることをたたえる」（新大系）意を比喩的に表している。

・すむ水にさやけきかげのうつればやこよひの月の名にながる覧
（千載集・秋下・三三六・大宮右大臣・「後冷泉院御時、九月十三夜月宴侍けるによみ侍ける」）

この「すむ月に…」詠は、「内裏御所の晴れの宴の月。水に映る艶やかな月」（新大系）を詠んだ歌であり、後の名月の特別に澄んで美しいさまを表現している。

以上のように、月との関連で用いられた「さやけし」は、秋の月の非常に明るい様子を表現する例が多いのに加え、釈尊の教えを比喩的にたたえる用法、宮中の名月の澄んだ美しさをたたえる用法などが見られる。

・冬の夜の池の氷のさやけきは月の光の磨くなりけり
（拾遺集・冬・二四〇・元輔・「廉義公家障子」）

・なにかおもふ春の嵐に雲晴れてさやけき影は君のみぞ見ん
（金葉集・雑上・六〇三・周防内侍・「これを奏しければ、内侍周防を召して、これが返しせよ、と仰せ言ありければつかうまつれる」）

・夕月夜ほのめくかげも卯花の咲けるわたりはさやけかりけり
（千載集・夏・一四〇・右近衛大将実房・「暮見卯花といへる心をよみ侍ける」）

右の三首は、月以外のものについて、「さやけし」が用いられた例である。「冬の夜の…」詠は池に張った氷に月の光が映った清らかな美しさを、「さやけし」と表現している。「なにかおもふ…」詠では、「さやけき」は日の光の明るさを表現し、帝の恵みの比喩となっている。「夕月夜…」詠の「さやけかり」は、卯の花の白さについて、「満月の光のように明るい」（新大系）の意を表している。

これらはすべて明るいさまを示していて、月について用いられた用法と共通した用いられ方と言えるだろう。

以上のように、八代集で「さやけし」は、主として月について、そのとても澄んで明るいさま示すために用いられている。

そこでは、『万葉集』に多く見られた、川、山が感じさせる、清らかですがすがしいさまを示す用法が全く見られなくなっていて、『万葉集神事語辞典』が指摘する「古代の人々の独特な美意識」も希薄になっていることがわかる。

おわりに

形容動詞「さやかなり」は、『万葉集』では使用例が四例と少なく、それも連用形ばかりで、もっぱら副詞的に用いられていた。

八代集になると、十五首の和歌に用いられ、述語として、あるいは連体修飾語として用いられる例も見られるようになる。また連用形で用いられている場合も、副詞的用法に加え、視覚的・聴覚的に具体的な意味内容を伴う例が見られる。

「さやかなり」が叙述、修飾する対象も、八代集では、白雪、秋の月の光、河の流れ、禊をする人の心、郭公の声、紅葉、花の色、誓いなど、自然から人事まで、多様なものが見られる。類義語である形容詞「さやけし」が、『万葉集』に比べて八代集では多様性を失い、もっぱら月の澄んだ明るさの形容に限定して使われるようになったのとは対照的に、「さやかなり」は、ずっと幅広い用法を八代集において獲得したことが知られる。

注

（1）『万葉集』からの引用は、『新編日本古典文学全集』（以下、新編全集と略称する）による。

（2）八代集からの引用は、新日本古典文学大系により、適宜表記を改めた。文中で同叢書に言及する際は、それぞれの歌集名を省き、「新大系」という略称を用いる。

（3）上條彰次校注『千載和歌集』（一九九五年、和泉書院）。

（しえ　じん　本学大学院博士後期課程）